

# クリスチャンユースの死生観形成に関する質的研究

—— 自殺予防教育の観点から ——

岡 村 直 樹 (東京基督教大学准教授)

## 目次

1. 研究の出発点と意義	40
2. 質的研究の方法	42
3. 研究方法と研究対象者	47
4. 研究結果	49
5. 思春期の自殺予防教育に関する研究	52
6. 自殺予防と宗教の関係に関する研究	56
7. 結果分析	58
8. 自殺予防教育とキリスト教会やキリスト教主義 教育機関の役割	61
9. 最後に	65

## 1. 研究の出発点と意義

平成21年5月に警察庁生活安全局生活安全企画課から発表された「平成20年中における自殺の概要資料」によると、2008(平成20)年の自殺者数は3万2249人と11年連続で3万人を超えた。人口10万人あたり、23.7人という自殺率を国際的に比較しても、先進8カ国、いわゆるG8の中で第一位、データが収集された世界101カ国の中で8位という高い数字

である。また本研究の対象となる思春期人口に関しては、2005年に厚生労働省が公表した「自殺死亡統計」に、日本人の年代別の死因の割合で自殺は、10代後半（15歳～19歳）の男性の死因の2位、女性の1位と報告されている。未成年者の自殺者総数は、全体の約2%と比較的少ないが、自殺未遂者は、既遂者の10倍は存在すると推計されており、大きな社会問題である事に間違いはない。さらに近年、疑似自殺とも言われる自傷行為も大きな社会問題となっている。2006年度に実施された調査によると、首都圏12校の中高生のうち、男子学生の7.5%、女子学生の12.1%に自傷行為の経験が認められたという<sup>(1)</sup>。自傷行為の経験を持つ者の自殺既遂率は、自傷行為未体験者の数百倍であるという研究結果もあり、自傷行為と自殺行為には密接な関連性があると考えられている<sup>(2)</sup>。しかし一方で、思春期の男女に対する自殺予防教育（自傷行為理解を含む）に対して、社会的にはあまり大きな感心が払われていないのが残念な現状である<sup>(3)</sup>。

一方で欧米、特に北米においては政府機関が、中高生を対象にした自殺予防教育に積極的に取り組んでおり、さらには、宗教（主にキリスト教）と青少年の自殺行為、自傷行為に関する研究も盛んで、様々な研究結果が報告されている。本研究の観点から特に興味深いのは、キリスト教会への定期的な出席や、教会のユースグループへの積極的な関わり合いが、自殺予防に肯定的な役割を果たしているという研究結果や、キリスト教系学校に通うユースは、公立学校に通うユースに比べて自殺率が低いといった研究結果が、社会心理学系や臨床心理学系の学会誌等に数

- 
- (1) 松本俊彦, 今村扶美, 「青年期における『故意に自分の健康を害する』行為に関する研究」, 『財団法人明治安田こころの健康財団, 2006年度研究助成論文集通巻第四二号』, (2007年), 37-50。
- (2) David Owens, Judith Horrocks, and Allan House, "Fatal and non-fatal repetition of self-harm: Systematic review," *The British Journal of Psychiatry*, 181 (2002): 193-199.
- (3) 高橋祥友, 「青少年の自殺予防に対する一提言」, 『保健医療科学』52-4 (2003年), 326-331。

多く掲載されている事である<sup>(4)</sup>。

本研究は、我が国において比較的関心が薄い自殺予防教育について、特にキリスト教会、キリスト教教育機関の果たせる役割という観点から考察するものである。具体的には、思春期のクリスマン（以後クリスマンユースと呼ぶ）の持つ死生観やその形成プロセスを質的研究方法を用いて調査し、その結果と既存する自殺教育の方法やその効果等と照らし合わせ、それらに基づいたキリスト教教育機関や教会による実践的な取り組みを模索するものである。

## 2. 質的研究の方法

本研究は上記の目標、すなわち自殺予防の観点からクリスマンユースを知り、彼らのキリスト教における様々な宗教体験が、どのように彼らの持つ死生観に影響を与えたかについて学ぶため、質的研究という研究方法を用いる。質的研究は大まかに言えば、研究対象を数においてはなく、その質において理解し研究する事を指す。量的研究において研究の質は、数量的にサポートされた統計学的データに基づくものでなくてはならず、ある意味機械的にデータが解析、分析されていく過程でそれが決まるものである<sup>(5)</sup>。一方質的研究に関しては、以下のようなユニ

---

(4) ①定期的な教会出席と自殺率の低下には相互関係が認められるとする論文。Kirmayer, L. J., L. J. Boothroyd, and S. Hodgins. 1998. "Attempted Suicide among Inuit Youth: Psychosocial Correlates and Implications for Prevention." *Canadian Journal of Psychiatry-Revue Canadienne De Psychiatrie*, vol. 43: 816-822.

②キリスト教系の高校に通う生徒と、公立の学校に通う生徒を比較した場合、キリスト教系の高校に通う生徒の方が自殺リスクが低いとする論文。Greening, Leilani and Stephen J. Dollinger. 1993. "Rural Adolescents' Perceived Personal Risks for Suicide." *Journal of Youth and Adolescence*, vol. 22: 211-217.

(5) Michel Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, (Thousand Oaks, California: Sage Publications, Inc., 2002).

一クな特徴を挙げる事が出来る<sup>(6)</sup>。

- ・質的研究は仮説を立てること、またその検証することを目的としない。
- ・質的研究は実験的研究状況を設定しない。
- ・質的研究はインタビューやその他の観察を重視し細かい記録を作成する。
- ・質的研究は研究過程での研究者の主観を考慮しその内容を取り入れる
- ・質的研究は記録以外に得られた資料も排除せず総合して検討する。
- ・質的研究は研究対象の一般性や普遍性より、具体性、個別性、多様性に即する分析を行う。
- ・質的研究は研究対象や、そこに派生する様々な問題を社会・文化的な文脈の中で取り扱う。
- ・質的研究は質的データに基づいて分析、理論化を行い、現象に内在する意味を見出す。

質的研究は具体的な事例を重視し、個々の現象を時間、地域性といった特殊性の中で捉えようとする方法である。また特に人間自身の行為や表現を出発点として、それを実生活の場所と結びつけて理解しようと試みる方法でもある<sup>(7)</sup>。さらにこの研究方法は、量的研究が取り扱いを躊躇する、人間の立ち振る舞い、感情の動き、直感といった部分にも大胆に切り込むことを可能とするのである。

質的研究のアプローチを科学的な研究方法にまで押し上げた功績を持つのは、バーニー・グレイザーとアンセルム・ストラウスの2名である。彼らの質的研究方法論は、グラウンデッドセオリーとして知られ、データ収集、データ分析、理論構築という3つの主な段階から構築されてい

---

(6) 大谷尚「質的研究とは何か?」,『教育システム情報学会誌』25-3(2008), 340-354。

(7) ウヴェ・フリック『質的研究入門-〈人間の科学〉のための方法論』(春秋社, 2002年), 22頁。

る<sup>(8)</sup>。本研究のようにインタビューを中心に据えたデータ収集をする場合、研究者は自らの予見に頼らず、研究対象者が出来る限り自由に語ることが出来るよう心がけつつ質問の内容や、話しの導き方をオープンに保つことが必要とされる。インタビューの内容そのもの以外にも、社会学や心理学の研究分野でその重要性が証明されている人間の非言語によるコミュニケーション、すなわち研究対象者の語調、顔の表情、体の動き、視線、服装等までもが重要なデータとして記録される。また研究対象者の数も、量的研究の場合のように多くを必要とはしない。広く浅く学ぶのではなく、狭く深く学ぶことから、研究対象者や対象とする様々な現象をどれだけ深く掘り下げることが出来るかという点が重要なのである。データの収集後、研究者が理論の構築に進むには、まずデータ分析を通じてさまざまなカテゴリー（まとめ、又は概念）を生成し、それらを組織化していくこと、言い換えれば、収集されたデータを一端バラバラにし、新しく組み替えて再構築する作業が必要となる<sup>(9)</sup>。ストラウスによれば、例えばある社会現象を質的データを通して分析しようとする場合、カテゴリー生成の枠組みには、2つの側面が存在するという<sup>(10)</sup>。その社会現象が起こる条件、要因、状況、現象からどのような結果が生まれているかという構造的側面と、その社会現象がどのような展開や、やり取りを経ているのかというプロセス的側面である<sup>(11)</sup>。またデータ分析のために必要なもう一つの手法に coding（コーディング：符号化）がある。コーディングとは、データ中の諸概念を識別し、特性を発見した上で構造的に関連づけ、新たな概念を構成し、理論化を可能にす

---

(8) Anselm Strauss and Juliet Corbin, *Basics of Qualitative Research* (Thousand Oaks, California: Sage Publications, Inc., 1998), p. 12.

(9) 木下康仁『ライブ講義M—GTA—実践的質的研究法』（弘文堂、2007年）、209—216頁。

(10) Strauss and Corbin, p. 123, p. 192.

(11) 関口靖広「理論生成とグラウンデッド・セオリー・アプローチ」, [http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ysekigch/qual/grounded.html] (2009年8月31日現在利用可能)

るためにコード(コードワード)を付ける作業である<sup>(12)</sup>。その上で質的に得られたデータを分析し、そこに見出すことのできる共通点や相違点等から理論構築を行うのである。この最終的な理論構築は、グラウンデッドセオリーの到達点とも言える。グラウンデッドセオリーという名前からもわかるように、構築された理論は推論や試論に基づくものではなく、現象が起こっている現場、つまり「グラウンド」(地面、地べた)から直接に得られたデータを基に築かれたものであり、最も現実に近いものとなるのである。

また特に、本研究のように、質的研究の方法が宗教の実践的研究に用いられる上にも大きなメリットがあると考えられる。質的研究は、量的に表すことの難しい宗教心、信仰心、感情、心の動き、対人関係といった分野において有効だからである。質的研究が量的研究と大きく異なる点は、上記したようにデータを数量化する必要が無い点である。例えば「寂しさ」の感情を量的研究が取り扱おうとするとき、「何回寂しいと思ったか。」「以前よりその回数は増えたか減ったか。」「研究対象者の何割が寂しいと感じたか。」といった種類の質問が必然的に研究の中心となり、そこには厳密な構造が要求される。対照的に質的研究では、研究対象者の言葉を質問で遮ることなく、感じたままに語られた言葉や語調、さらに仕草までが研究データとして加味され分析されるのである。質的研究は量的研究のようにいわゆる科学的合理性に優れている研究方法ではなく、主観的で直感的な側面を持ち合わせる研究であることはたしかである。実際、質的研究の第一人者であるマイケル・クイン・パットンは、質的研究のデータ分析を「科学であり芸術」(the science and the art of analysis)と呼び、研究者の創造性を研究の重要な要素としている<sup>(13)</sup>。サウスウェスタン・バプテスト神学校の組織神学者、ミラード・

---

(12) Strauss and Corbin, p. 153, p. 179.

(13) Patton, pp. 542-458.

エリクソンは、その著書『キリスト教神学』の中で、「神学は学であると同時に、ある種の芸術でもあるため、厳密な構造に従わせることはできない。」と述べている<sup>(14)</sup>。本研究が質的研究の方法を用いて取り扱おうとしている宗教心や信仰心といった課題は、キリスト教における重要な神学的研究の課題でもあるが、質的研究と神学の研究の間に存在しうるそのような共通点は、質的研究が神学の諸課題を研究の対象とすることの妥当性を否定しないものであると言えるかもしれない。

さて質的研究はともすると、単なる「インタビューの記録と、そこから主観的に導き出される研究者なりの解答」と考えられてしまうことが多い。確かに質的研究はその性質上、研究者の主観がデータ収集から分析に至るまでの随所に用いられており、またそれを抜きにしては成立しないものである。しかし実際は研究のデータ分析のプロセスにおいて、量的研究も含む既存の研究の結果を参考として用いることも多く、さらに前記のようにコーディングという非常に細密なデータ分析を必要とする研究方法でもある。質的研究は近年、様々な学術研究分野において用いられる研究方法となっており、特に心理学、看護学、教育学、社会学、文化人類学等においては、ひとつの主流な研究方法として確立されつつある。一方で、質的研究は非常に限られた地域で、限られた人数を対象に行われているため、研究の結果を直ちに広く一般化することが出来るという性質の研究ではない。さらに時の流れと共に、研究対象者もまた研究対象者をとりまく社会環境も変化することから、研究結果の実際の有効期間も様々であろう。質的研究の結果は、そのユニークな研究の特性を十分確認した上で、理解、応用されるべきものである。

---

(14) ミラード・J・エリクソン『キリスト教神学・第1巻』（いのちのことば社、2003年）、70頁。

### 3. 研究方法と研究対象者

本研究はマイケル・クイン・パットンの著書、Qualitative Research and Evaluation Methods に記述されたグラウンデッドセオリーのガイドラインに沿って実施されたものである<sup>(15)</sup>。研究の開始段階で研究対象者となったのは、高校を卒業して2年以内で、自らをクリスチャンと認識する若者30名である。まず彼らに、クリスチャンとしての背景（家庭環境、信仰歴、教育歴等）と死生観や自殺に関する簡単なアンケートに答えてもらった。アンケート調査は、研究者が教鞭を執る大学と、いくつかの教会の若者の集まりにおいて実施された。アンケート結果を見てとても興味を覚えたのは、30名中ほとんどが、今まで自分の「死」や「生」について真剣に考えた事があまり無いと返答した点であった。

エッセイの内容を参考に、パットンのガイドラインに沿って研究対象者を絞り込む為に Homogeneous Sampling（均質サンプリング）を選択した<sup>(16)</sup>。サンプリング（sampling：抽出見本）とは量的研究のように大人数を研究の対象とすることの出来ない質的研究において、より意図的（purposeful）に研究対象者を選択しようとするプロセスを指す言葉である。Homogeneous Sampling とは、一定のサブグループをより深く知ろうとする際によく用いられる方法で、いくつかの条件をつけて研究対象者を絞り込むことである。

今回均質サンプリングの方法を用いて選択されたのは10人の男女で、そこには以下の6つの共通点が存在する。

- 1) 高校を卒業して2年以内の者
- 2) 現在の自分をクリスチャンであると認識する者
- 3) ユースの時期以前に自分はクリスチャンになったと認識する者

---

(15) Patton, pp. 124–137.

(16) Ibid. p. 235.

- 4) 片親か両親が以前から（研究対象者自らをクリスチャンと認識する以前に）クリスチャンである者
- 5) 小学校の低学年から継続して教会に通っている者
- 6) 公立中学，公立高校を卒業した者

共通条件を（1）「高校を卒業して2年以内の者」としたのは，本研究の焦点である，ユース期（主に中高生の時期）から年月があまり経っておらず，その時期の自分を比較的鮮明に思い出す事が出来る者を選ぶという意図からである。10人の教会背景は様々で，日本基督教団，日本バプテスト連盟，日本同盟基督教団，アッセンブリーオブゴッド教団出身者等が含まれている。（6）の「公立中学，公立高校を卒業した者」という条件は，学校において特別な宗教教育（ミッション系学校で受けるような）を受けていない者という共通項であり，さらに（3），（4），（5）「両親か片親が以前からクリスチャンで，本人も小学校の頃からクリスチャンとして継続的に教会に通っている」という条件は，10人が長期に渡って教会に通い，教会の様々なアクティビティーに参加し，またいわゆるクリスチャンホーム育ちのクリスチャンであるという共通項である。

また本研究においては，情報データソースの多元化のために Triangulation of Sources の方法を用い，個人インタビュー，グループディスカッション，および学生の言動観察という3方向からの情報収集を実施した<sup>(17)</sup>。インタビューやディスカッショングループでは，Open-ended Interview Question（自由回答形式の質問）を用いて出来る限り自由に発言することを促し，質問への自由な返答に対して，「それはどういう意味ですか。」「もうすこし詳しく話して下さい。」といった答えの明確化を

---

(17) 情報収集におけるトライアングレーションは，情報ソースの多元化であり，データの誤差を減らす目的で用いられる。Ibid. P.247.

促す質問をフォローアップとして行った<sup>(18)</sup>。言動観察では研究が実施された場や研究対象者の通う教会での他者との自由な会話や研究者との会話の中で、本研究に関連性があると思われる部分を記録した。インタビューとディスカッショングループで用いられた質問は以下の6つである。

- 1) 「あなたは自分の死についてひとりで真剣に考えた事がありますか。ある場合、それはどのような事で、きっかけは何でしたか。ない場合、その理由は何だと思えますか。」
- 2) 「あなたは家族や友人と死について話し合った事がありますか。ある場合は、いつどのようなことを話しましたか。ない場合は、その理由はなぜだと思えますか。」
- 3) 「あなたは学校や教会で死について学んだ事がありますか。ある場合は、どのような事を学びましたか。ない場合は、どのような学びがあるべきだと思えますか。」
- 4) 「あなたは何歳くらいまで生きたいですか。また死ぬときどんな死に方をしたいですか。その理由は何ですか。」
- 5) 「あなたの死生観は、何の影響を最も強く受けて形成されたと思えますか。なぜそう思えますか。」
- 6) 「あなたは自殺したいと思っている人に共感出来ますか。」

#### 4. 研究結果

研究者は集められたデータを、回答の内容、頻繁に繰り返された言葉、また感情を込めて語られた言葉、といったカテゴリーを用いて分け、さらにコーディング方を用いてさらなるデータの細分化と生成を試みた。以下はインタビューと言動観察によって得たデータから導き出された結

---

(18) Ibid. p. 342.

果である。

- 1) 研究参加者の約半数が、今まであまり真剣に死について考えた事が無いと答えた。一方、考えた事があると答えた者のほとんどは、親類や知人の死、またペットの死が考えるきっかけとなったと答えたが、「真剣」の度合いは様々あり、また、考えた事の内容について詳しく覚えている者は少なかった。
- 2) 研究参加者のほとんどが、死を「自らに差し迫っている事柄」とは思っていないと語った一方で、死そのものより、死に方（長い闘病生活等）についての不安や恐怖感を口にした。多くは、親類縁者の死期や、メディア等でとりあげられた有名人の闘病生活を挙げ、それに自らが耐えられるかどうかかわからないと語った。彼らの多くは、自らの死を「未来の『ある時点』で起こる出来事」と捉えているようであり、逆に、自らの「人生観」やこれからの「生き方」と「死」の連続性や関連性について語った者はいなかった。
- 3) 家庭で死について話し合ったことがあると答えた参加者は約半数であった。あるという答えには、「身近な死（親類や知人、ペットの死に）について話した」が多かったが、それらが深く突っ込んだ会話であったかどうかは、はっきり覚えていないという答えが多かった。一方で「家族の間で死について語る事はタブーだった。」「死に関する話題は、意図的にさげられる事が多かった。」といった返答もあった。
- 4) 学校で死について学んだと答えた参加者は約半数であった。学んだと答えた者は、その内容を「死んではいけない」「死んだら終わり」「生きるってすばらしい」といった自殺予防的なものであったと語った。またそれらはビデオ等を通しての学びであり、その後クラスでの更なるディスカッション等は無かったようであった。

- 5) ほとんどの参加者が、教会で死について学んだことがあると語った。学んだと答えた者の多くは、その内容を「天国に行けるので死を恐れてはいけない」といった「天国」を強調するものや、「罪」と「死」を結びつける内容であったと語った。
- 6) 友人と死について真剣に語ったことがあると答えた参加者は、3名であった。その中で、知人の自殺について語った事があると答えた者は、その内容を、自殺における苦しい死に方と、楽な死に方についてであったと答えた。また自分の自殺願望を、友人に語ったことがあると答えた参加者も2名いたが、その他の参加者は、学校においても、また教会においても、死について、友人との間に真剣な語らいがあった記憶は無いと答えた。
- 7) 質問の(5)で用いられた、死生観という言葉は、ほとんどの参加者には耳慣れない言葉であると語った。自らの死生観(生や死に関する考え方)の形成に関し、大きな影響をとった要因として最も多く挙げられたのは、「親類縁者の死」「ペットの死」「友人知人の体験」といった人間関係や個人体験であった。「親類縁者の死」「ペットの死」と「教会で学んだ内容」を共に挙げた者が2名いた。
- 8) 「あなたは自殺したいと思っている人に共感出来ますか。」という質問は、研究の前段階で行ったアンケートにも記したが、「はい」と答えたクリスチャンユースは、30人中、7人であった。その後選ばれた10人の中で、「はい」と答えた者は2人で、両者とも、過去自らも自殺願望を抱いた事がありその時は本当に苦しかったから、と答えた。一方で、「いいえ」と答えた者の挙げた理由で多かったのは、「自殺は罪にあたるから」「神に喜ばれない行為だから」という答えであった。

次にインタビューを受けた同メンバーによるグループディスカッション

ンの内容と、それによって得たデータより導き出された結果を紹介する。

グループディスカッションの中で参加者達が自主的に、そして集中的に語ったトピックは、自殺願望を抱く人に「共感」出来るかどうか（質問の6番）についてであった。個々の表情や声のトーンから、これは彼らにとって重要なトピックであることが伺われた。まず「共感」という言葉の定義について、それは「頭での理解」と捉えるべきか、それとも「感情的な同意」と捉えるべきなのかなどといった質問や意見が出された。しかしディスカッションの中で、自らも過去に自殺願望を抱いた事があると語る者から意見が出されると、参加者全体の表情に緊張が走り、非常に真剣な眼差しが語る者に向けられた。自殺願望を抱くに至った経緯には、いじめや、心理的な問題等が挙げられたが、実体験を通しての、その時の苦しみの大きさや深さについての話しには、頷きながら聞く者が多かった。最終的に参加者の「総意」が形成されるには至らなかったが、「自殺は罪だから共感出来ない。」と声高に語っていた参加者も、最後には声のトーンを和らげ、「個人的意見として」という主張に変わっていったように見受けられた。ディスカッション後にディスカッションの感想を聞いたが、多くの参加者が、「とても良い学びの機会でした」「本当に勉強になりました」と真剣な表情で語った事が印象に残った。

## 5. 思春期の自殺予防教育に関する研究

文頭にも記したように、本研究の目的の一つは、クリスマンユースの持つ死生観やその形成プロセスを、質的研究方法を用いて調査し、その結果と既存する自殺予防教育の方法やその効果等と照らし合わせることである。当然の事だが、自殺の原因や、それに対する防止的アプローチは、多種多様である。鬱病に代表される精神疾患に由来する自殺の割

合は非常に多く、またそのような場合、医療の専門家による診断や、投薬による治療等が必要不可欠となるのは言うまでもない。一方で、本研究の焦点は、クリスチャンユースを取り巻く学校や教会という環境であることから、結果分析の前段階として、現在、日本の学校等でなされている自殺予防教育のアプローチにおいて説明、主張されている事柄を見ていきたい。

繰り返しになるが、思春期の若者に対する自殺予防教育（自傷行為理解を含む）に対して、社会的にはあまり大きな関心が払われていないのが現状である<sup>(19)</sup>。この事実を声高に指摘するのは、日本での数少ない自殺予防研究者、高橋祥友（たかはしよしとも）である。精神科医である高橋は、これまで日本社会では、自殺に対して「覚悟の行為である」「予防などできない」「遺族はそっとしておくのが一番」といった考えが根強かったため、自殺予防に対して十分な関心が払われてこなかったと、その理由を語っている<sup>(20)</sup>。高橋はまた、今の日本の学校の自殺に対する一般的とも言える取り組み（又は自殺事件に対するリアクション）に対し警鐘を鳴らす。例えば自殺事件の後に学校長が、全校生徒を講堂に集め「死ぬな」「命を粗末にするな」などと言って檄を飛ばすことは、かえって逆効果であると指摘する。学校における効果的な自殺予防教育は、生徒ひとりひとりへの個別のアプローチ、又は小グループによるアプローチで、個々の生徒達の反応をよく把握しながら進められるべきとしている<sup>(21)</sup>。また、死にたいという気持ちを持つ高校生の約8割から9割が、その気持ちを伝えたいと思うのは、家族や教師ではなく、同級生の友人であるという研究結果を紹介し、ピアケア（同年代の友人の介在と配慮）の重要性を指摘する<sup>(22)</sup>。死にたいという気持ちを打ち明けられた

---

(19) 高橋祥友「青少年の自殺予防に対する一提言」、326-331頁。

(20) 高橋祥友『自殺の心理学』（講談社現代新書、2005年）、3-44頁。

(21) Ibid., 90頁。

(22) Ibid., 96頁。

友人は、「批判を交えずに友人の自殺願望を傾聴し、絶望的な感情を理解しようとする事が大切」であり、そのうえで放置せず、「誠実な態度を貫きながら」大人の助けをあおぐ事が重要であるとしている<sup>(23)</sup>。

思春期の若者の自傷行為を研究する、国立精神・神経センター精神保険研究所の松本俊彦(まつもととしひこ)は、自傷行為を繰り返す若者に対するアンケートで、「親や教師のことを信用していない。」という答えが多かった調査結果を指摘し、そのような生徒に対する学校の対応の方法を以下のように説明する。「自傷をした生徒に絶対してはならないのが叱責と説教である。特に、頭ごなしに『自傷行為はやめなさい』という支配的な発言は『百害あって一利無し』といってよい。おそらく、『自分の身体を傷つけてどこが悪いの?』というお決まりの切り返しにあって答えを窮するだけである。』<sup>(24)</sup>発達心理学者のエリクソンは思春期に「同一性対同一性拡散」という心理的危機が訪れると主張するか、それは松本の説明を裏付けるものであろう。同一性とは「自分は何者か」「何者になるか」「どこに属するのか」「何を信じるのか」といった問いかけに対する答えを中心とするものであり、言い換えれば自分のアイデンティティを探す旅に出る時期と言う事が出来る<sup>(25)</sup>。またこの時期の発達に欠かせない要素は、親からの自立でもある。思春期以前のように親に全面的に頼っていた状態から抜け出すには、ある程度の反発が必要となるのである<sup>(26)</sup>。親やその他の権威者の欠点が目に付き、そのような存在に対する批判や反抗が始まるからである。頭ごなし的な自殺予防、自傷行為予防のアプローチの悪影響は、発達心理学の観点からも納得できるものである。

---

(23) Ibid., 99頁。

(24) 松本俊彦「自傷行為の理解と対応」、『現代のエスプリ：子供の自殺予防』至文堂、488(2008)、58-59頁。

(25) E. H. エリクソン『自我同一性』(小此木啓吾訳、誠信書房、1973年)、111-118頁。

(26) 後藤晶子『ライフサイクルからみた発達臨床心理学』(ナカニシヤ出版、1995年)、142頁。

また、思春期の若者に対するピアケアの必要性や、一方的、支配的なアプローチの悪影響は、自殺予防に限られるアプローチではない。本研究の研究者が以前行った、「クリスチャンユースの信仰心の発達に関する質的研究」でも、クリスチャンユースが互いに与える影響の大きさや、教会リーダーの支配的な態度が与えるネガティブな影響が明らかにされている<sup>(27)</sup>。

中学生の自殺予防を現場の立場から研究する阪中順子(さかなかじゅんこ)は、中学生の自殺の事後調査から、学校における友人の不在を、重大な自殺動機のひとつとして挙げている<sup>(28)</sup>。また、ある中学校で自殺した中学生が、実は事前に自殺願望をクラスメイトに告げていたのだが、その中学生の発言を聞いた彼らは、それを「冗談」としかとらえず、それが原因で自殺を防げなかったという事件を紹介している。さらに、この事件後に発足した自殺調査委員会が、周囲の学生の「生と死のイメージが希薄であり、(彼らは)死の問題を軽くしかとらえていなかった。」と分析したことも合わせて紹介している<sup>(29)</sup>。中高生の自殺を防げない大きな理由は、家族や教師の認識不足にあると同時に、ピアケアの不在、つまり同年代の友人知人の助けが無い事も、その理由の一つであると指摘している。

繰り返しになるが、自殺の原因や、それに対する防止的アプローチは、多種多様である。しかし一方で、思春期における自殺予防教育という限られた事例や研究例の中で、頻繁に繰り返されるピアケアの重要性和必要性は、特筆されるべき点であると思われる。

(27) 岡村直樹「日本のユースミニストリーの方向性とユースリーダーの資質に関する質的研究」、『総神大学日韓宣教協力国際学術会議モノグラフ』(総神大学生涯教育院, 2008年), 46-57頁。

(28) 阪中順子「中学生の自殺予防」、『現代のエスプリ』: 子供の自殺予防』至文堂, 488 (2008), 88-89頁。

(29) Ibid.

## 6. 自殺予防と宗教の関係に関する研究

本研究の結果分析の前段階として、もうひとつ確認しておくべき研究に、宗教と自殺予防の関係に関する研究を挙げる事ができる。思春期の若者に対する自殺予防教育に対して、社会的にはあまり大きな関心が払われていない現状をすでに述べたが、自殺予防と宗教の関係に関する研究の数も同様に少ない。欧米では、比較的多くの研究がなされている中で、自殺大国日本におけるこの分野の研究は、今後さらにその必要性を増すであろうと思われる。以下に、数少ない研究の中から、本研究とかわり合いのある研究を2つ紹介する。

斎藤友紀雄(さいとうゆきお)は、日本のいのちの電話連盟常務理事であり、日本自殺予防学会の理事長でもある。東京神学大学出身の同氏は、日本における自殺予防の第一人者であり、米国ランカスター神学校でキリスト教神学と臨床心理学を学んだ経験を持つ。2006年に出版された「平和と宗教」24号に、「死ぬことなく、生きながらえて—現代キリスト教自殺論の試み」という、キリスト教の視点から自殺予防を考えた論文を執筆している。この中で斎藤は、キリスト教がその歴史の中で、自殺を反道徳的行動であると見てきたとことを指摘している<sup>(30)</sup>。実際キリスト教会は、アウグスチヌス以来「自殺」は、神が与えた命の軽視であり、また殺人と同様、常に道徳的に見て反対すべきものとして排斥してきた歴史を持つ<sup>(31)</sup>。マルティン・ルターは自殺を悪魔の所業と非難し<sup>(32)</sup>、ボンヘッファーもアウグスチヌスやルターと比べればずっと柔軟ではある

---

(30) 斎藤友紀雄「死ぬことなく、生きながらえて：現代キリスト教自殺論の試み」、『平和と宗教』24号(2006)

(31) Saint Augustine, Bishop of Hippo, *City of God, Book 1* (London, J. M. Dent & sons ltd., 1942), Sections 18-26.

(32) Martin Luther, *Commentary on the Epistle to the Galatians* (Translated by Theodore Graebner, Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House, 1949), Chapter 2, pp. 68-85.

が、自殺を戒め、「どのような場合でも神の御手にその命を委ねるべきである」と語っている<sup>(33)</sup>。しかし斎藤は、自殺予防の現場から、こう証言する。「自殺傾向のある人間にとって、神から与えられたいのちとその尊厳についての説得が、単に理念的なものであれば虚ろに響くものである。彼らにとって、宗教や価値観の類は少しも慰めとはならない。」<sup>(34)</sup> また彼はさらにこう続ける。「宗教は自殺者を裁きまた疎外すべきではない。自殺者とその家族をケアし、支援するのが社会の役割であり、また宗教の務めでもある。……重要なことは、死を願う者の苦悩や虚無感、絶望感を共感しまた共有することである。」<sup>(35)</sup> 自殺予防の現場から発せられる斎藤の声は、自殺予防における一方的な態度の悪影響と共感力に支えられたピアケアの必要性を訴えた前記の高橋と松本の声に呼応するものであると言えるだろう。

「まず私の基本的な立場を明確にしておきたいが、いずれの宗教にも組しない立場である。」という一文から始まる記事を記した、青森県立精神保健福祉センターの渡邊直樹(わたなべなおき)は、「宗教と自殺—自殺予防活動に携わる立場から」という研究の中で、現場で感じた、宗教の持つ自殺予防効果を評価してこう語る。「わたしは宗教そのものというよりも宗教のもつ共同性や凝集性が、大きな自殺抑止効果をもつと考える。…別のことばでいえば『互いに気持ちを伝え合うこと』なのである。」<sup>(36)</sup> それは、「高齢女性が一人暮らしをしても別居の娘さんから毎日のように電話で『お母さん元気?』と声掛けがあるような『こころの支え』」を指す。「キリスト教のみならず仏教や民間信仰においてもこの点でプラスの面が認められる。」と主張する渡邊も、斎藤同様、宗教の持つピア-

(33) Dietrich Bonhoeffer, *Ethics* (Macmillan, 1955), pp. 124–125.

(34) 斎藤友紀雄, 「平和と宗教」24号

(35) Ibid.

(36) 渡邊直樹「宗教と自殺—自殺予防活動に携わる立場から」, 『平和と宗教』24号 (2005)

ケアという自殺防止効果を強調するのである<sup>(37)</sup>。

## 7. 結果分析

上記の「思春期の自殺予防教育に関する研究」と「自殺予防と宗教の関係に関する研究」をふまえた上で、もう一度本研究の結果（インタビュー、グループディスカッション、言動観察を通して得たデータ）を振り返り、その分析を試みたい。分析は、研究参加者自身の自殺予防に関してというよりは、上のセクションで繰り返し語られた、同年代者の自殺予防に目を配る者の重要性、つまり、ピアーカー・ギヴァー（Peer Care Giver）としての潜在的な力（ポテンシャル）という側面に注目するものである。

1) 研究結果からまず際立って目についた事は、研究参加者のほとんど（具体的には10名中8名）が、「死」について今まで真剣に深く考え、また継続的にそれと向き合う事を殆どしてこなかったという点であろう。また自らの「人生観」やこれからの「生き方」と「死」に連続性や関連性があると捉えている者も少なかった。親族の死やペットの死は、時に深い考察のチャンスを参加者に与えたが、多くの場合それは断片的な自問自答に終わってしまったようである。本研究の参加者はすべて、公立学校に通い、その中の約半数は、ビデオ教材等を通して行われた自殺予防教育の時間を覚えていたが、それもまた「死」に対する真剣な考察や態度にはつながらなかったようである。

しかしここで特筆すべきは、参加者は皆、クリスチャンホーム（両親か片親がクリスチャン）に育ち、長期にわたる教会生活（少なくとも10年以上）を続け、また自らをクリスチャンと認識するという共通点を持

---

(37) Ibid.

つ者であるにも関わらずの結果……という点ではないだろうか。キリスト教は、「生」と「死」に対する取り組みを、その中心的な教えに据える宗教であると言えると思うが、少なくとも本研究の参加者は、彼らが通ったキリスト教会においても、又、彼らが育ったクリスチャンホームにおいても、「生」と「死」について真剣に深く考えた時（時期）を思い出す事が出来なかったのである。阪中順子が、公立学校における自殺の事例研究から、自殺した生徒が同級生に自殺をほのめかしていたにも関わらず、彼ら（同級生）の「生と死のイメージが希薄」であったが故に、自殺予防につながらなかった事例を紹介したことは既にも書いたが、クリスチャンホームに育ち、長期にわたる教会生活を続け、また自らをクリスチャンと自認する者の持つ「生と死のイメージ」もまた「希薄」とすれば、自殺予防における、彼らのピアーカー・ギヴァーとしてのポテンシャルはどのようなものであろうか。

もちろん、今回の研究対象者は10名であり、この10名から得たデータだけを見て、同年代のクリスチャン全てに同じ事があてはまると端的に言う事は出来ない。本研究が質的研究であり、量的研究に見られる統計学的な確かさを備えていないからである。しかし一方で、今回の研究結果は、過去に本研究の研究者が実施した幾つかの研究の結果と良く似た結果をもたらしている。2005年に実施された日本人留学生の宗教心の発達に関する質的研究<sup>(38)</sup>、2007年に実施されたクリスチャンユースの信仰成長に関する質的研究<sup>(39)</sup>、さらには2008年に実施されたクリスチャンの老後観に関する質的研究<sup>(40)</sup>によって明らかにされた共通点は、日本人ク

---

(38) Naoki Okamura, "Intercultural Encounters As Religious Education: A Phenomenological Study On A Group Of Japanese Students At A Christian University In California And Their Religious Transformation" *The Journal of the Religious Education*, Routledge, (2009:7-8): 289-302.

(39) 岡村直樹, 「日本のユースミニストリーの方向性とユースリーダーの資質に関する質的研究」

(40) 岡村直樹, 「シニアミニストリーとスピリチュアリティの質的研究」, 『キリストと

リスチャンの信仰心の成長や育成は、教会における説教や学びによってではなく、個人的な体験や、他者との交流によってもたらされる相互効果によって起こることが多いというものである。今回の研究に参加した者の中で数名が、親族の死やペットの死を通して「死」について考える機会があったと答え、また「あなたの死生観は、何の影響を最も強く受けて形成されたと思いますか。」という質問の答えで最も多く挙げられたのがやはり、親族の死やペットの死であったことは、過去の研究結果と相容れるものである。もし特定のリスチャンユースが、まだ親族の死やペットを体験しておらず、「死」について他者と語り合う機会も無かったとすれば、彼、又は彼女の「生と死のイメージ」が「希薄」である可能性は十分考えられるのではないだろうか。

2) 自殺予防教育の観点から、次に注目されるべき研究結果は、「あなたは自殺したいと思っている人に共感出来ますか。」という問いに対する答えであろう。研究結果の部分ですでに述べたが、研究の前段階で行ったアンケートの中で、この質問に「はい」と答えたリスチャンユースは、30人中、7人で、その後選ばれた10人の中で、「はい」と答えた者は2人であった。「いいえ」と答えた者の挙げた理由で多かったのは、「自殺は罪だと思うから」「自殺は神に喜ばれない行為だから」といういわゆる神学的な答えであった。「自殺は罪」「自殺は神に喜ばれない行為」という答えを活字で読むと、何か非常に冷酷な印象を受けるが、実際のインタビューでは、多くの場合、これらの答えは即答されたものではなく、首を傾げ、口を真一文字に結び、しばらく悩んだ末の返答であった。「共感するとは、どういう事ですか。」という研究者への質問も繰り返された。最後の質問(6)への返答は、他の5つの質問への返答とは明らかに異なり、そこには質問と自身の返答に対する大きな躊躇が見えた。

---

世界』(東京基督教大学紀要, 2008年), 113-137頁。

高橋祥友は、ピアーカーに関して、死にたいという気持ちを打ち明けられた友人は、「批判を交えずに友人の自殺願望を傾聴し、絶望的な感情を理解しようと努める事が大切」と主張し、松本俊彦は、「自傷をした生徒に絶対してはならないのが叱責と説教で、特に、頭ごなしに『自傷行為はやめなさい』という支配的な発言は『百害あって一利無し』とってよい」と述べていることは既に記したが、これらの「現場」からの主張と、本研究参加者の多くの返答は、相容れないものであろうか。研究者の受けた印象は、そうではない。確かにキリスト教の伝統的な自殺観は、それを「よし」とせず、参加者の多くはその理解を共有するようであったが、一方で彼らは、自殺願望を持つ人に「できれば共感したい」、「一方的に裁く事は避けたい」と感じていたようである。それはグループディスカッションにおいても明らかになった。6つ用意された質問の中で、彼らが最も「引かかった」のは、この「共感」という言葉であり、まずこの言葉がディスカッションのトピックとしてとりあげられている。「自殺は罪か?」という神学的な問題に白黒をつけることより、目の前にいて、苦しみ、自殺願望で悩む者に手を差し伸べる事が最優先されるべきであるという趣旨の発言も相次ぎ、自殺願望を持つ者に対する「批判的」「差別的」な態度はほとんど見受けられなかった。これは、「自殺を罪」であるとする神学的伝統を受け継ぐ彼らが、「裁いてはいけない」という聖書の言葉を、同様に重んじていることを示しているのではないか。そしてもしそうであれば、本研究の結果は、彼らが自殺予防に関するピアーカー・ギヴァーとしてのポテンシャルを持ち合わせていることを示唆していると考えられるのである。

## 8. 自殺予防教育とキリスト教会やキリスト教主義教育機関の役割

ではここで、今回の研究結果と、上記された既存の自殺予防教育の方

法やその効果等と照らし合わせたうえで、それらに基づいたキリスト教教育機関や教会による2つの実践的な取り組みを研究者の立場から提言する。

1) 生と死について真剣に考えるという態度は、クリスチャンとしての教会生活や、クリスチャンホームにおける家庭生活で自動的に身につくものではないということが、本研究でまず明らかになったのではないだろうか。「長期に渡る教会生活をしているから。」「牧師の説教をいつも聞いているから。」「クリスチャンホームに生まれ育ったから。」とあって、その人が(特にユースの場合)「死と生」についての高い意識を持っていることにはつながらないのである。そしてもしその実態を認めるのであれば、教会やキリスト教系教育機関は、クリスチャンユースの死生観形成という、自殺予防教育という枠を超えた非常に大切な課題に、もっと積極的に関わるべきであり、また、説教や教会学校での受動的な学びといった従来の教育方法だけではない、新しい効果的な方法を模索する必要があるということにならないだろうか。

クリスチャンユースの死生観形成に関する効果的な方法を考える時、研究者の頭に、今回の研究で用いられたグループディスカッションの様子がただちに浮かんだ。ディスカッションの中で、自らも過去に自殺願望を抱いた事があると語る参加者が数人現れた時、参加者全体の表情に緊張が走り、真剣な眼差しが語る者に向けられ、苦しみの大きさや深さについての話しには、頷きながら聞く者が多く見られた。さらにその中で積極的な意見交換が起り、体験談以外の話し、たとえば以前牧師の説教で聞いた話しなどもある意味新鮮さを持って語られていたようである。

ボストン大学神学部、学部長(Dean)であるメリー・エリザベス・モアーは、その著書「Teaching from the Heart: Theology and Educational Method」の中で、現象学的教育方法を宗教教育における最も効果的な教育方法のひとつとして紹介し、こう語っている。“Phenomenology is a method of reflecting on experience and letting conclusions emerge from

those reflections.”（現象学的学びとは、個々の経験について熟考し、その考察から答えを浮かび上がらせる方法である。）<sup>(41)</sup>現象学的教育方法とは、従来の「先生が語り生徒が聞く」というトップダウンの教育方法ではなく、学ぶ者が、それぞれの体験を持ち寄り、他者とのインターアクションを通して、それぞれの結論が形成されていく教育方法を指す。今回実施したグループディスカッションは、そのような教育結果を参加者にもたらしたのではないだろうか。「生と死」に関する実体験や、過去の経験、また聖書で読んだこと、教会で聞いたことなど、それまで断片化し、また忘れかけていた情報や思いが、能動的なディスカッションやセルフリフレクションによって統合され、それがグループディスカッション後の、「とても良い学びの機会でした。」というコメントと真剣な表情に変わったのではないかと感じている。例えばこのような教育方法を教会やキリスト教系教育機関が取り入れる事は、クリスチャンユースの死生観形成、さらには、自殺予防に必要な、「死に対する高い意識の形成」にきっと良い結果をもたらすのではないかと期待する。

2) 本研究の参加者と似た背景を持つクリスチャンユースの多くが「希薄な生と死のイメージ」しか持ち合わせない可能性が明らかになった一方で、多くのクリスチャンユースは、実際は自殺予防におけるピアーカー・ギヴァーとしての良いポテンシャルを持ち合わせていると考えられる。今回研究に協力してくれた多くのクリスチャンユースは、自殺は罪であるとする神学的な背景を持ちながらも、「人を裁かず愛したい」「自殺願望で苦しむ人の力になりたい」という基本的な態度示したことは既に述べたとおりである。このポテンシャルは、今後大いに伸ばされるべきであろう。

---

(41) Mary Elizabeth Moore, *Teaching from the Heart* (Harrisburg, Pennsylvania: Trinity International, 1998), pp. 83-84.

斎藤友紀雄は、このように語っている。「自殺問題はかつて宗教なり道徳の問題とされ、価値観による説得とか励ましが必要と考えられていた。ところが現代の精神保健においては、そうした対応が必ずしも援助的・治療的でないということが一つの常識である。自殺の実態を前にする時、いかに価値観による対応が虚しいか、少しでも自殺問題とかかわった者は等しく経験するところである。」同氏はさらにこう続ける。「人間関係ができていないところで、あるいは心の絆がないところでは治療さえ困難であるのに、まして価値観による説得などは無理である。」<sup>(42)</sup>ここで重要なのは、「自殺は罪である」という神学的立場を堅持するか廃棄するか選択かという神学的な論争ではなく、真剣に自殺予防に取り組もうとするときは、「裁いてはいけない」(マタイ7:1)「隣人を愛しなさい」(レビ記19:18)という、やはり神学的な戒めを「優先させる」事なのかもしれない。そしてそのメッセージは、自殺予防教育に取り組む教会やキリスト教系の教育機関で声高に語られるべきであろう。また渡邊直樹は、「宗教のもつ共同性や凝集性が、大きな自殺抑止効果をもつと考える。…別のことばでいえば『互いに気持ちを伝え合うこと』なのである。」と語っている<sup>(43)</sup>。互いに愛し合うコミュニティ形成は、いわばすべてのクリスマンが宗派、教派の垣根を越えて同様に目指すものであるが、渡邊の主張は、そのようなコミュニティが自殺予防に大きなメリットとなると主張するものである。愛による共感力を持った「個々」育成と、そのような「個々」から形成される愛のコミュニティの必要性を、教会やキリスト教系教育機関が語り勧めることが、更なる自殺予防につながるという事ができるだろう。

---

(42) 斎藤友紀雄、「死ぬことなく、生きながらえて：現代キリスト教自殺論の試み」『平和と宗教』24号

(43) Ibid.

## 9. 最後に

神学者カール・バルトは、キリストを裏切り、自らの命を絶ったイスカリオテのユダを「福音の宛先人」と呼んだ<sup>(44)</sup>。それは、神に逆い、自らの命を奪おうとする人にこそ、ある意味優先的にキリストの福音が必要であるという意味であろう。また彼は、「教会は、自殺を防止する言葉をもっている。」と述べている<sup>(45)</sup>。その言葉とは、人間は「生きなければいけない」という義務的で一方的な言葉ではなく、バルトの言う、神に「生きる事を、許された」存在、つまり人は、「生きる自由を与えられた、神を喜ぶ存在」であるというメッセージではないだろうか。自殺大国日本において、キリスト教会、そしてキリスト教系の教育機関は、社会に向けて続けて神の愛を語り、さらには特に、自殺願望に苦しむ人や、自傷行為で自らを傷つけるユースに対して、積極的に愛の手を差し伸べる使命が与えられているのではないかと思う。

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」(ヨハネ福音書15:12)

---

(44) 渡邊直樹、「宗教と自殺－自殺予防に携わる立場から」『平和と宗教』24号

(45) カール・バルト『教会教義学』(新教出版, 1998年), 第2巻『神論』(2分冊)

(46) カール・バルト『教会教義学』(新教出版, 1998年), 第3巻『創造論』(4分冊)